
道のり果てしなく、

高田高

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

道のり果てしなく、

【コード】

N6655D

【作者名】

高田高

【あらすじ】

モンスターハンター、FF作品です。『原始大陸奮闘記』の世界が軸になっています。そのため、作者独自の要素がかなり多いです。そこは、まあ、FF作品ですから。ちなみに『原始』のキャラは一切出て来ません。

道のり果てしなく、

第1話

原始大陸『 Gondwano 』と呼ばれる島国から数千 km、小規模ながら製鉄技術は世界最高と言われる武器生産国がある。

その名は、

バステイーノ

バステイーノ・ギルドはその街の4割を占める程の巨大施設で、依頼斡旋は当然の事、鍛冶屋から食事処、更には宿屋も兼用のなんでも屋。

1階が依頼斡旋の受け付けと酒場を兼用しており、酒場のテーブル数は15、6席。それを切り盛りしているのが、2匹のアイルーと呼ばれる、二足歩行可能なネコに似た原始動物とギルドの看板娘アイルーの名前は、白生地に黒ぶち模様のコテツと、全身グレーのマサムネ。看板娘の名前はアネット、通称アニー。

アニーは昔 Gondwano でハンターをやっていたらしく、ある依頼で戦ったティガレックスと言う、四足歩行型の恐竜のような外見のモンスターに深手を負わされ、引退したらしい。あくまで噂だが。

賑やかな酒場に、一般的な麻布の服に同素材のスボン姿、ボサボサに伸ばした金髪の少年が戸を開けて入って来た。

少年が真っ先に向かったのは、依頼案内板。

依頼案内板とは、そのまま、依頼を張り出している掲示板。ここにある依頼のほとんどがそれほど急用でもないDランククエスト。

依頼には4段階のランクがあり、子供でも出来るD、ちょっと危険なB、熟練ハンター向けのA、そして、古龍などを相手にするS

道のり果てしなく、

がある。Sランクなどは、年に一度有るか無いかと言ったレベル。
少年は目当ての依頼を見付けられなかったのか、受け付けに向か
った。

「いらっしやい。何か飲む？」

アニーの言葉に、少年は首を振って否定する。

「Cランク見せて欲しいんだけど」

アニーは、後の棚に置かれた少々厚めの本を取ると、少年に渡し
た。

Dランク以上の依頼は依頼書を束にして、一冊にまとめている。
一見面倒だが、ルーキーハンターが上位ランクに手を出して無駄死
にしないためのギルド側の配慮。

少年が依頼書をぺらぺらめくっていると、

「あ！これ、もーらい！」

少年の横から手が伸び、明るい声と共に依頼書をかすめ取った。
少年が振り返ると、そこには麻布のワンピース姿、腰には緩めに
革のベルトを巻いており、髪は黒髪を後で束ね、だらりと垂れ下げ
たキリンテールの少女がいた。

「おい、驚かすなよ！」

少年の少し怒りのこもった一言に、少女は悪びれるでもなく微笑

道のり果てしなく、

んだ。

「ねね！ あなたもハンターよね？ 一緒にこれ、やらない？」

差し出された依頼書には、

『Aランク 砂漠

ディアブ羅斯の討伐』

と書かれてある。

ディアブ羅斯とは、闘牛のような威圧感のある角を持つ、非常に
獰猛なモンスター。犠牲者は多く、熟練ハンターでも苦戦は必至。

「やる？ やらない？」

「ちょっとジーナ。あまり困らせてはダメよ」

アニーの言葉に、ジーナは、ごめんなさい、と一応謝りはしたが、
当然反省など感じられない。ジーナを知る者にとっては当たり前
事ではあるが。

ジーナの名前に少年は、少し驚いた表情を見せた。

「あんだ、あのジーナか？ びっくりだ。凄腕のガンランス使いが
こんなペチャガキだったとは」

少年の言葉に、ジーナの眉がぴくりと跳ねると、表情を険しくさ
せた。

「ペチャガキとは随分ねえ。……あんだ、名前は？」

「シノ、だけど……」

道のり果てしなく、

ジーナの迫力に押され、多少びくつくシノではあったが、それを見抜かれまいと腕を組み、睨む。

その態度にジーナは腹を抱えて大笑いした。

面白くないシノは舌打ちすると、依頼書を再びぺらぺらめくりはじめた。

「ごめんねえー、怒った？」

「別に……」

ジーナは、ふて腐れるシノの隣に立つと、先程の依頼書をアニーに渡した。

「あなた一人でいいのね？」

「シノと二人」

「はあっ！？ ちよっ！ 無理だつて！ 俺、昨日ようやくクック討伐成功したばっかだぜ！？」

クックとはイャンクックの通称。頭部にある円形に広いエリマキが特徴的な鳥竜。クチバシによるつつつきや体内にある発火器官を発熱させて吐き出す火炎弾は、新米ハンターには少々厳しい。

「クック。……ふうーん。いいよ、オツケ！ オツケ！」

ジーナは依頼書にサインすると、続けてシノのサインを書き加えた。

道のり果てしなく、

「い、ごらー！ 何してんだよー！」

「うるっさいなあ。いいじゃんよ。どうせ暇でしょ？」

「……暇、だけど」

煮え切らないシノに、ジーナはため息をつくど、両手を勢いよくシノの両頬に張り付けた。

「理由はどうあれ、強いモンスターとの戦いはハンターには重要な事なのよ？」

ウジウジしない！」

「あ、ああ……」

ジーナの勢いに押され、シノはうなずいた。

一部始終を見ていたアニーは、呆れ顔でため息をついた。

「無茶しないでよ？」

「はいはい！」

「……無茶だよ」

2人がギルドを出て行った後、しばらくして少女が酒場を訪れた。

「こんにちは、アニー」

「え？ ジーナ？」

道のり果てしなく、

「はい？」

先程酒場を出て行ったジーナと同じ背丈、顔立ちの少女を見て、アニーは焦りの表情を浮かべギルドの外に出たが、当然先程の2人はいない。

「アニー、どうしたの？」

少女の言葉に、アニーは疲れた表情を浮かべた。

「また、あの子が……」

「ええ？ またですか？ もう、手間掛かるんだから。……しばらく様子見ましよう。痛い目に合えばいい加減懲りるでしょ」

シノの災難はこうして幕を上げた。

《続く》

道のり果てしなく、

第1話（後書き）

シノは17、ジーナは19、アニーは30代と言った感じですが、看板娘じゃなくて、とうが立った看板お姉さんでしょうかね？

道のり果てしなく、

第2話

ギルドを出てジーナと別れた後、シノは自宅近くの雑貨屋に向かった。

ギルド内にも雑貨屋はあるが、今向かおうとしている店は古くからのなじみ。

店に付くと、愛想の良い笑顔で店主のオヤジさんが顔を出した。

「シノちゃん、いらっしやい！」

「うっす。

……うーん。何がいるかなあ。回復薬は当然だろ。後、閃光玉に、音爆弾。

……ダメだ。緊張して考えがまとまらねえよ」

イヤンクツクに辛くも勝利した翌日、砂漠の暴君たるディアブロスと戦う。誰が聞いても自殺行為に等しい。伝説とまで言われるガランランスの使い手のジーナがいるとは言え、不安はある。

「シノちゃん、顔色悪いよ？ 大丈夫かい？」

オヤジさんにシノはあまり大丈夫ではなさそうな笑顔を送ると、適当に道具を買い、自宅へ戻った。

道のり果てしなく、

自宅は木造1階建て。旧市街にある町並みは昔ながらの木造が多いが、一步新市街に入ると、鉄鋼による補強を施した、地震程度に

はびくともしない石造りの家が立ち並ぶ。

シノは自室に戻り、武具収納箱に体を通つ込み、目当ての物を取り出した。

バトルシリーズと呼ばれる鉄鋼石を加工した鎧を全身に着込んだ。武器はスネークバイト改と呼ばれる剣。正直強くはない。クツクになら十分かもしれないが、ディアブロス相手には、素手と変わらない。ちなみに予算の都合で盾はハンターカリングからの代用品。更に不安はつる。

ハンターカリングとは、片手剣と呼ばれる武器系統内最弱のもの。当然盾の強度も最弱。

「死ぬかも……」

シノは置かれた状況の最悪さにがっくり肩を落とすと、少しよるけながら家を出た。

街の出入り口となる石造りのアーチ門に着くと、待ち侘びていたのか、ジーナが腕組みをして、入口に立っていた。

「遅いんじゃない？」

「……その格好で行くつもりか？」

シノはジーナの装備に呆れた。それと言つのも、全身を初心者防具である、ハンターシリーズで揃えているからだ。

ハンターシリーズとは、初心者ハンターが少し金が貯まり、ちょっと防具のグレードを上げようかなあ、と言っくらの決して高級

道のり果てしなく、

なものではない。更に言えばバトルシリーズの方が値は張る。

「なに？ 変？」

「変？ つて、……変だよ！ ディアブロス相手にハンターって！ 死ぬ気か、あんた！？」

シノの剣幕に、ジーナは不思議そうな表情で首を傾げた。

「ディアブロス相手なら、これくらいで十分よ。ザザミとかの方がよかった？」

「ザザミにしてくれよ。」

他にもスゴイ防具あんだろ？」

ジーナは少し考え込むと、ぱんつと音を響かせて手を叩いた。

「前に倒した報酬で作ったのがあったわ。」

えーつと……。あ、そうそう！ クシャナ！」

シノはクシャナと言う名前を聞いて啞然とした。

古龍クシャルダオラ。

いわく、風翔龍。

いわく、鋼龍。

容姿はまさに龍。巨大な両翼に、屈強な四本の足。そこから伸びる黒く輝く鋭い爪。そして、極め付けは、取り巻く暴風。風を自在に操る事から風神とまで言われる存在。

そんな飛龍の素材から出来るのが、クシャナシリーズ。当然強固。

道のり果てしなく、

ハンター憧れの的である飛竜リオレウスの素材から出来るレウスシリーズなど、クシャナの前ではかすんで見える。

「……すげえ！」

あんた、すげえな！ こ、今度見せてくれよ！」

興奮するシノに対し、ジーナは申し訳なさそうな表情で頬をポリポリ搔いた。

「ああー……。残念。売った、あれ」

一瞬の間……。

「はああー！？

う、売っただとお！？」

ななな、何してんだよ！ クシャルダオラを倒した記念みたいなもんを売ったあ！？」

「いや、だって……。可愛くないし……」

ジーナのなんと乙女チックな理由に、シノは軽く目眩を覚えた。

「可愛くないって、……。わかった、もういいよ。さっさと砂漠行こう」

シノは深くため息をつくとき、自分とのあらゆる物事の差にがっかり肩を落とし、街を出て行った。

「ちよっとー！ そんなにクシャナ欲しかったのー！？」

道のり果てしなく、

道のり果てしなく、

ジーナは先に出て行ったシノを急いで追い掛けた。

《続く》

第2話（後書き）

実は短編のつもりだったんですがねえ。だらだらと長くなってしまいました。

道のり果てしなく、

第3話

バステイノから北に十数km。一面を砂が覆う大地。砂海とまで呼ばれる砂漠地帯。

グラダ・デーパーシー

なぜ深海と呼ばれるのか？ それは超古代の文献によると、ここグラダには海が広がっていたらしいからだ。それを決定付けるのが、所々にある魚竜の骨。島国であるバステイノだが、ここグラダから隣海までは気球を使っても3日はかかる。つまり、こんなところに魚が生息しているはずがない。過去、深海であつた事の揺るがない証。

そこへ訪れた2人はと言うと、

「つ、疲れた……」

「お、俺も……」

2人は簡易キャンプに辿り着くなり、ベッドに突っ伏した。

こんな事になったのも、ジーナが、金が掛かるのでパズウを使わず徒歩で行こう！ などと言ったせいだ。ちなみにパズウとは、大型草食獣のアプトノスを配合して生み出された家畜動物で、性格はアプトノスを超えるのんびり屋で極めて温厚。のんびり屋とは言え、歩幅があるため人間の歩行速度の2、3倍はある。

道のり果てしなく、

そんなわけで、疲労しきつた2人は、とりあえず今日は休憩する事にした。

飲み水の確保として、地底湖に下りた2人は、当然ながらモンスターに絡まれてしまった。

2人を挟みうちにしたのは中型で獰猛なモンスター、ドスゲネポス。超古代に存在した、二足歩行型の鳥獣の進化した生物で、大きく前かがみした姿勢が特徴。長い尻尾と水平にする事で体重を支えているらしい。体色は茶色に近い黄、牙や爪には麻痺毒が染み込んでいる。

シノは一步下がると剣を抜いて構えた。

一方ジーナは、

「シノ、武器、置いて来ちゃった……！」

「なにー！？」

しかし、ジーナは焦る事もなく、それどころか余裕の表情。武器を構えるシノは真逆に焦りまくっている。

「大丈夫、大丈夫。これ、あるし！」

ジーナが手に構えたのは剥ぎ取り用のナイフ。当然、刃物なわけだから殺傷能力はある。しかし、それはあくまで動かないものに対して。動く生物に刃を立てれば、当然刃はきしむ。耐久性が低ければ、あっという間に折れてしまう。

「おいおい！ それでやるわけ？」

道のり果てしなく、

「余裕！」

シノはドスゲネポスの噛み付きを盾でいなしながら、シノに目を向けた。なんだかんだ言うものの、クシャルダオラを倒すほどのハンターの戦い、見たくないわけがない。

ジーナは頼り無いナイフを、大道芸のようにくるくる宙で回しながら遊ぶと、面白い事に、ドスゲネポスはそれを目で追っている。ネコがねこじやらしに夢中になるような状況。

次の瞬間、ジーナは飛び上がり、宙に舞ったナイフを掴むと、ドスゲネポスに向けて刃を突き立てた。突き刺さったのは、左目。ジーナは着地すると、苦しむドスゲネポスの足を水平蹴りで払い、寝転がったドスゲネポスに乗り掛かった。

「ふう……。チェックメイト」

左目のナイフを引き抜くと、両手で柄を掴み、首を掻き切った。当然抵抗するが、片目のせいとか、それとも襲う激痛からか、爪の振り払いも噛み付きも空振りしている。ジーナは腰に提げたポーチから音爆弾を取り出し、首に開いた傷口に無理矢理ねじ込み、ジーナが離れると同時に鈍い音を立てて炸裂、ドスゲネポスは体を痙攣させながら絶命した。

シノがようやく自分側にいたドスゲネポスを倒した時、ジーナは地底湖に下りて水を汲みに向かっていた。

「剥ぎ取りナイフなんかで……伝説のガンランサーは伊達じゃない、か」

道のり果てしなく、

夜ともなると昼間の熱気が嘘のように凍てつく。
当たり前前の知識なため、それ用の準備はして来ていた。
まずは携帯用暖房器。火山で発掘される紅蓮石を燃料にして、熱を発生させる優れたもの。そして、基本中の基本、ホットドリンク。

「……シノ、ドリンク分けて……」

「……嫌だね」

睨み合う2人。凍てつく砂漠に置いて、暖房道具はまさに命綱。マイナスまで気温が下がる中で、ホットドリンク無しなど考えられない。

「一本」

「ダメ」

「一口」

「嫌だ」

「ケチ」

「ケチで結構」

道のり果てしなく、
そう言ってシノがドリンクに口を付けようとした瞬間、ジーナは

それを奪い取り一気に飲み干した。

「あ！」

「……っはあ。生き返るー！」

シノは呆れた表情でバッグから干し肉を取り出し、豪快にかぶりついた。

ジーナもバッグから缶詰を取り出すと、剥ぎ取りナイフを器用に扱い上蓋を取り外し、中に入っていたささ身肉をナイフの刃先に刺して口に放り込んだ。

「随分ワイルドだな」

「んー？ まあね。ハンター生活長いから」

ハンター生活が長いわりには、いくつか引つ掛かる部分がある。まず、武器を置いて移動する。慢心では無く不注意過ぎる。更に暖房道具を持って来ていない。世間知らず過ぎる。

「あんだ、本当にあのジーナか？ 実は別人？」

「シノの言うジーナが誰かは知らないけど、私はジーナよ。正真正銘、ジーナ・スウィーニアよ」

「……そうか。それにしても、随分準備がなってないよな。まるで素人だ」

「忘れたのよ。昔からそう。回復薬忘れたり、肉忘れたり、一番ひどかったのは武器忘れた時かな」

道のり果てしなく、

ジーナは鼻の頭を搔くと、苦笑しながらささ身肉を口に放り込んだ。

「冗談ではないのだろう、明るい性格のジーナの表情がやや暗い。」

「……なあ、なんで俺を誘ったんだ？」

シノは、ジーナを気遣って話題を変えた。落ち込むジーナは見るに耐えない。

「うーん……。」

見込みがあるって言うのもあるし、なにより気に入ったからよ」

「見込み、ねえ」

「才能なんて自分じゃ気付きにくいものよ。」

あの、出来れば気に入ったって言う方に反応して欲しかったんだけど？」

「明日も早いし、お休みい〜」

シノは耳栓をすると、簡易キャンプに備え付けられたベッドに倒れ込み、あつという間に眠りはじめた。ジーナはシノを起こさないようにゆっくり近付くと、寝顔を覗き込みくすくす笑った。

「はあ〜……、やっぱり可愛いなあ、シノ」

一応断っておくが、シノは長身で顔立ちも男らしい男なので、可愛いとかはまったく似合わない表現。感じ方、価値観は千差万別と言う事。

道のり果てしなく、

道のり果てしなく、

ジーナはシノの腕に抱きつくと、これまたあっという間に眠りはじめたのだった。

《続く》

第3話（後書き）

アクションシーンみたいなものはガッツリ入れてません。ちょっと疲れてます。

道のり果てしなく、

第4話

翌日。右腕の妙な痺れる感覚に目を覚まし、体を起こそうとしたが、何かに右腕を掴まれ起き上がれない。何事かと目を向けると、ジーナがネコのように丸まりながらシノの腕に抱き付いていた。

とりあえずジーナを引っぺがすと、ディアブロス討伐用に道具の準備をはじめた。道具は武器防具の手入れは当たり前、回復薬のチェックから爆弾関係の火薬の準備までとにかく様々。

特にシノは扱う爆弾の火薬は自分オリジナルなため、詰め込み作業も自分が行う。調合作業に近いが調合ではない。材料が根本的に違うからだ。

通常、タル爆弾に使われる火薬は火薬草とニトロダケを使うわけだが、シノは火薬岩を細かく砕き、カクサンデメキンの破裂器官を混ぜ合わせる。その威力はクツクの堅いクチバシを砕く程。

細かい作業を繰り返していると、突然背後からジーナがもたれ掛かって来た。

「シノ、おはよ。」

「何してんのお？ 料理い？」

ジーナは寝ぼけ眼を軽くこすりながら、石製の水入れに溜めておいた水で顔を洗った。

旧市街に住む人間やハンターには馴染み深い、半円形の石製の水入れ、通称コツクル。コツクルとは古代大陸語で溜めると言う意味。新市街では軽くて丈夫なフルフルラバーコツクルが主流。

道のり果てしなく、

「あー……。」

もう一眠り……」

シノはベッドに戻ろうとするジーナの手首を掴み、二度寝を阻止する。

「今日はディアブロス、狩るんだろ？」

ジーナは大欠伸をしながら、渋々支度をはじめた。

全身に防具を着込むと、照り付ける太陽熱でガンガン体力が奪われる。

「あつつう……。シノ、準備出来てる？」

「OK、行くか」

こうして、ようやく目的のディアブロス討伐に向かう事となった。

砂漠の気温は40度をゆうに超え、景色をゆらゆらと幻想的に歪める。

人間の視覚に映し出されたそれを、脳が感じ取り、軽くトリップ状態にさせる。砂漠での長時間活動は極めて危険。

ジーナはポーチから黄色の液体が入った瓶を取り出し、全身に振り掛けた。

千里眼の薬。聴覚、嗅覚と言った動物的感觉を一時的に強化する薬。普通飲むものだが、稀にジーナのように扱うハンターもいる。理由は単純、外が暑いから。

道のり果てしなく、

ジーナは目をつむると、耳の後に手を当てて聞き耳を立てた。

「……結構近いわ」

「……おい、前」

「何よ？」

ジーナが目を開けると、シノが正面数km先を指差し、石像のよ
うに固まっていた。

指の先には、ディアブロスがいたわけだが。

「で、デカくね？」

「しかも黒いね」

名称 デュアルバサック 正式学名

ディアブロス亜種

通常の白い甲殻のものと違い、黒い甲殻が特徴でひどく獰猛。頭
部の角は通常のものより長く2mは軽く超える。体長は7、8mは
あろうか。

幸いまだ発見されていないわけだが、

「シノ、武器構えて」

「あれとやるの？」

「そうよ、何を今更」

ジーナは呆れた表情でシノを見ると、背中に折り畳まれたガンラ

道のり果てしなく、

ンスを取り出した。

ガンランスは全体が白い毛皮に覆われた、砂漠で目にするとなんとも暑苦しい、ヘルステイニングと呼ばれるもの。性能も価値もそこそこの中堅レベル。

ジーナが構えたのを見て、シノも仕方なく武器を構えるが、恐怖から手が震える。

「大丈夫、バサツクの特技は体当たり。と言うかそれ以外はたいした事ないわ。落ち着いて、ガード。」

……OK?」

ジーナの声はゆっくりはつきり落ち着いている。人に教える事は慣れていくらしく、それだけで緊張がほぐれる。

シノは恐怖や緊張を飛ばすように、顔を左右にぶんぶん振ると、武器を握る手に力をこめた。

「よし、よし。じゃ、ゆっくりね」

バサツクはこちらに気付かないらしく、辺りをキョロキョロするばかり。それだけ見ていると、なんとも愛嬌がある。

後少しと言う距離で、ジーナは足を止め、槍先を前方に突き出した。

「シノ、竜撃砲発射が開始の合図だから、よろしく!」

ジーナは指先にあるトリガーを引くと、槍先から高音の熱を放射しはじめ、充填完了と共に大爆音を響かせ、バサツクの全身を炎と爆発が襲った。

道のり果てしなく、

「竜撃砲……とんでもないな」

「ボサつとしない!」

シノはジーナの声に気付き、バサツクの爆音のような叫び声を盾で防いだ。

全ての盾には衝撃吸収材と共に反響材が加工されている。音波を反響、相殺する超技術。

しかしながら、小型のシノの盾では完全に防ぎきれず、尻餅をついてしまった。

シノが顔を上げると、

闇のように黒い顔に浮かぶ、赤く輝く2つの瞳。

生物の根源的恐怖を煽るそれは、対峙したハンターいわく、絶対恐怖。

「あああ……」

シノは目の前で鼻息荒く立ちはだかる強大過ぎるモンスターに、低く悲鳴をもらす事しか出来なかった。

「シノ! 立って!」

バサツクの突進に合わせてジーナがシノの正面に立ち、間一髪でそれを防いだ。

「ジー……ナ」

道のり果てしなく、

「武器持つて！ 口閉じて！ 立ちなさい！」

ジーナの激にようやく我に返ったシノは、武器を拾い上げると、多少震えてはいるがしっかり構えた。

それを横目で確認したジーナは、盾をぐぐつと押し込み、バサックと力比べでもするように互いに互いに前方に体重をかけた。

「シノ、足、がら空きになってるから！」

シノはうなずくと、少し大袈裟にバサックの横に走り込み、剣を振り下ろした。

当然ながら堅い甲殻は、シノのスネークバイトを容易に弾いた。

その時、バサックが低くうなり、尻尾を大きくしならせた。

「シノ、ガード！」

一瞬遅く、シノは尻尾による薙ぎ払いの直撃を受け、体を横転させた。

それに気を取られ、力が弱まった隙を付き、バサックは首を振り上げ、思い切りジーナの盾を付いた。

「しまっ!?!」

バサックは盾ごとジーナを弾くと、続けて突進した。それをなんとかガードするが、構えが十分でなかったため弾き飛ばされた。

何歩かよろけながら後ずさりしながらも、体勢を整えると、盾を構え、横目でシノに目を向けた。

シノはよろけながらもなんとか立ち上がっていた。

道のり果てしなく、

「シノ、大丈夫？」

「……ああ、不思議と大丈夫だ」

実際は大丈夫なわけもない。全身の骨をきしませる程の超暴力は、痛覚を麻痺させている。

ジーナはかんばしくない状況に舌打ちした。

「おい、ジーナ。剣が弾かれるんだけどっ、と」

シノはバサツクの体当たりを前転で回避した。意識がもつろつとしているせい、恐怖や緊張が切れてしまっている。

「それは当然よっ、と！」

ジーナもバサツクの体当たりを盾で軽くないしながら、これまた軽く答える。ただし、表情に余裕はない。

砂漠の熱が確実に2人を蝕みはじめていた。

《続く》

道のり果てしなく、

第4話（後書き）

作者はSっ気が強い方です。なので、主人公達をボコボコにしてやります。　ところでヘルステイングって、毛皮に覆われてましたっけ？　資料が素材表しかないので完璧、想像です。

道のり果てしなく、

最終話

盾を構える2人に、バサツクは体重を乗せた体当たりをぶちかます。

単純過ぎる軌道、無策の突進。故に他への無駄がない。ただ、相手を薙ぎ倒すだけの純粹過ぎる闘争意識。避けられようが塞がれようが力を緩めない様は、暴走しているとしか言いようがない。

誰が付けたかバサツク。 古代大陸語で狂暴と言う意味がある。

バサツクの何度目かの突進を防いだ時、シノは体力の限界からか膝を付いた。

「うあ……、え？ あれ？」

シノ自身状況を理解出来ない。興奮状態にある生物は脳が極度の緊張や度を越えた疲労を抱えた時、耐え切れず疲労感を一時的に力ツトする事がある。ハイテンションと言う状態。疲労を感じないが、確実に疲労は重なる。

疲れを感じないのに体が動かない、まるで金縛り。

「まずいなあ、バサツク相手にするつもりじゃなかったしなあ……」

ジーナは戦闘不能状態のシノを横目で睨み、唇を噛んだ。

「ジーナ……」

「なに？」

道のり果てしなく、

「俺、あんたに憧れてハンターになったんだ。だからさ、結構楽しかったよ」

シノの突然の告白に、ジーナは一瞬気を緩めるが、再び盾を構えなおした。

さすがに体力の限界を感じはじめたジーナは、ある作戦をとる事にした。

その作戦とは……。

「……逃げる」

「……は？」

「バスケット相手にお荷物がいたら不利過ぎるのよ！」

「正論過ぎる正論だが、無理矢理引っ張り出されたシノとしては納得がいかない。」

「逃げるのかよ!？」

「あんた、気付いてないみたいだけど、さっきの尻尾にやられて骨折れてるよ？」

「え？ マジ!？」

そんな話をしていると、鼻息荒く、バスケットが突進して来た。

道のり果てしなく、

ジーナは武器を背中に折り畳むと、シノを背負って逃げ出した。

「わああああ！ 来てるって！ 真後ろに来てるって！」

「わかってるわよおお！」

命からがら、なんとかキャンプまで逃げ延びた2人は、とりあえずベッドに突っ伏した。

「し、死ぬかと、思った」

「ば、ばか、言わないで、よ。バサツク、ごときに、殺されて、たまり、ますか！」

あえぎあえぎ、声を絞り出しながら、2人は仰向けになって寝転がった。

「……はあ、冗談キツイよ。結局竜撃砲一発撃っただけだろ」

「だね。……はは、お姉ちゃんみたいにはいかない……あっ」

ジーナは焦って口を両手で塞ぐが、すでに遅い。シノがじとーっとした目でジーナを睨み付けた。

「お姉ちゃん……？」

道のり果てしなく、

「あははは！　そ、そんな怖い顔、しないで、ね？」

「正直に話せば怒らないでいてやる」

ジーナは、彼女ミーナの双子の姉だった。

ついでにミーナは駆け出しハンター。ジーナと狩りに出掛ける事も多く、モンスターの能力を見誤っているところがある。

ベテランハンターであるジーナの真似事をしていたわけだ。

「そうかそうか、姉さんがジーナだったわけか。

お前、よくも騙してくれたな！　しかも妹のお前に告白しちまっ
たじゃねえかよ！」

「いいじゃんよ！　怒る事無いっしょ？　顔同じなんだし！」

「そう言う事じゃないし！」

「男のくせにウジウジ言うな！」

「悪いか！？」

「悪い！」

2人の不毛な口喧嘩はしばらく続いたとか。

その後、駆け付けた本物のジーナが、バサックをあっさり討伐し、
ミーナの危険過ぎるお遊びは幕を下ろした。

道のり果てしなく、

数日後。酒場の受け付けで頼杖を付きながら、依頼書を眺めるシノの姿があった。

シノの肩を叩く手に気付き振り返ると、

「またお前かよ。もう騙されないからな」

乱暴に手を払うが、予想と違い反論なりしてこない。それどころか、やけにしおらしくもじもじしている。

「あ、あのう、先日は妹がご迷惑を掛けてしまったようで……」

ミーナの態度とは真逆のそれに、シノは明らかに焦りを見せた。双子なのだから間違えても仕方ないわけだが、ベテランハンターにタメ口どころか、お前呼ばわりして焦らないわけがない。

「す、すみません！ てつきりミーナがまたからかいに来たもんだと……」

「いいんです。よくある事だから」

互いに、あははー、と乾いた笑い声を上げていると、明るい声が酒場に響いた。

「シノー！ クックック狩りに行くよー！」

ミーナと狩りに行く予定は無かったが、その笑顔に見ていた依頼書を閉じた。

道のり果てしなく、

「ミーナ、クックだろ。」

「まあいいや、ちゃんと準備しろよ。回復薬忘れんなよ?」

「アイサー!」

2人のやり取りを見て、ジーナとアニーはくすくす笑っていた。

「ミーナったら、最近すごく楽しそう」

「理由はどうあれ、好きな人と一緒にいられて嬉しいんでしょう?」

ミーナがハンターになった理由は、ジーナへの憧れもあったが、酒場で見掛けるシノに引かれたせいでもあるとか。

狩場である森林地帯へは、パズウではなく徒歩での出発。またまたミーナが金を出し渋ったせいだが、

「シノー!」

「なんだよ?」

「なんでもないよー!」

道のり果てしなく、

道のり果てしなく、

道のり果てしなく、

ただ、笑顔は絶えない

おわり

最終話（後書き）

一気に書き切ると、すごく辛いです。皆さんは真似しないように！
いや、ホント、目がめっちゃめっちゃ痛いよ。

結局主人公達なにしに行ったんでしょ？ 作者自身が聞きた
いよ。 シノとミーナの話は続ける気はさらさらありません
が、原始の世界軸でネタが出来たら、また会いましょう！

道のり果てしなく、

道のり果てしなく、

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6655d/>

道のり果てしなく、

2009年3月24日11時16分発行